事例報告

図書館提案科目

全カリ総合Ｂ「北欧に学ぶ」を実施して

芦田　祥子

図書館では、2009年度前期に全学共通カリキュラム総合Ｂにおいて「北欧に学ぶ～知識社会を豊かに生きる力～」を提案した。図書館の全カリ授業科目への参画は初めての試みであり、試行錯誤しながらの実施となった。図書館が全カリ授業に関わった経緯を含め、実施報告を以下に記す。

1. 図書館と情報リテラシー教育

図書館では近年、学習支援の一環として情報リテラシー教育を重点課題の一つとして取り組んでいる。具体的には、図書館の活用法やデータベースを使った情報検索技術を中心とした「図書館活用講座」や、授業の中で講習を行う「授業内情報検索講習会」を実施している。

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（答申）」では、学習成果に関する参考指針の中で、情報リテラシーを、論理的思考力や問題解決力などとともに、汎用的技能の一つとして位置づけている。そこでは、情報リテラシーを「情報通信技術（ICT）を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる」と定義している。また、米国大学図書館協会（ACRL）では、情報リテラシーは生涯学習の基盤であり、自学自習や自律した人間の育成につながると明示している[1]。これを言いかえると、情報リテラシーは、課題探求能力であり、生涯にわたって必要な「生きる力」と捉えることができる。

こうした定義を、今まで図書館が実施してきた情報リテラシー教育プログラムに照らし合わせると、課題も見えてくる。現行の授業内情報検索講習会では、情報収集の側面からどちらかというと方法論を中心としたコンテンツを提供している。授業内情報検索講習会は年100コマ以上展開しており、受講生は延べ3,500名にのぼるが、質・量ともに飽和状態にあり、その効果を含めて図書館側にある種のジレンマがあることは否めない。その背景を探っていくと、次のような実情があることがわかる。まず、授業と図書館とのつながりが、学生に充分に伝わっていないという点である。図書館が、情報リテラシーは必須の能力であり、大学での学びにおいて図書館は欠かせないという理論のもと、そのスキルについて切々と語っても、一方通行で独りよがりになりかねない。次に、ウェブ主流の時代にあって、その真偽はともかく以前より容易に情報を収集することが可能となり、学生の図書館利用のモチベーションが変化していることが考えられる。これからは、多くの情報を集めることよりも、質の高い情報を選別し、活用していくプロセスがますます重要となってきており、情報リテラシーを身に付けているか否かが、学生の学習

[1] ACRL, Information Literacy competency standards higher education, 2000
http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/standards/informationliteracycompetency.cfm

能力、たとえばレポート・論文などの成果物の質と直結してくる。

このような背景から、図書館は、図書館講習の前提にある「情報リテラシーの必要性」について、学生に気づきの機会を提供する場が必要であると考えた。また、情報を活用する能力は、論理的思考力・問題解決能力などとも複合的に関わっている点も重視し、全カリ授業科目への参画にあたっては、他大学図書館が実施しているような「スキル教授型」ではなく、「教養科目型」で展開していく方針を打ち立てた。

2. 授業企画

カリキュラム策定においては、どこに主眼をおくか図書館内でも議論があった。なぜ「北欧」なのかという問いは開講後も受講学生含め各方面から聞かれた。先述のとおり、この授業では「教養科目型」での展開を目指し、情報リテラシーという漠然とした概念を、学生の興味関心あるテーマに落とし込んでいくことを重要なポイントと考えた。OECD の「学習到着度調査(PISA)」で高順位にランクされる北欧諸国、とりわけフィンランドは読解力の高さで注目されている。また北欧は、古くから生涯学習・成人教育が盛んで、図書館文化・読書文化の発展した地域である。こうした諸々の要素に着目し、「北欧」を軸に知識社会に必要なスキルを学ぶというカリキュラム構成ができあがった。さらに各回のテーマは、文学・教育・芸術など学生の興味関心を引き出す幅広い内容を選び、そこから日本の教育、図書館へとつなげることとし、コーディネーター、全期間担当者（サブコーディネーター）と協議を重ね、ゲスト・スピーカーを選出していった。

【授業概要表】　＊敬称略

科目名	北欧に学ぶ～知識社会を豊かに生きる力～
担当	コーディネーター：小川有美（法学部教授） 全期間担当者：松下慶太（兼任講師）、菅沼隆（経済学部教授）
開講キャンパス	池袋キャンパス
開講時限	水曜　２限
受講者数	約２６０名
授業内容	1. イントロダクション 2. 北欧の文学（末延弘子：フィンランド文学翻訳家） 3. 北欧の教育（松下） 4. 北欧と環境・平和（小川） 5. スウェーデンの社会システム（中間真一：ﾋｭｰﾏﾝﾙﾈｯｻﾝｽ研究所） 6. 北欧の IT（工藤繁登志：フィンランド技術庁） 7. 北欧の芸術（新田ユリ：指揮者） 8. ノルウェーの社会システム（岡本健志：前ノルウェー王国大使館勤務） 9. フィンランドの教育と図書館（藤森聡美：信州大学大学院医学系研究科） 10. フィンランドの読解力とＰＩＳＡ（西島徹：読売新聞記者） 11. 日本の教育と生涯学習（近藤弘：学校・社会教育講座教授） 12. 知識社会と大学図書館（芦田祥子・宮尾香奈子：本学図書館） 13. まとめ

3. 授業概要

別表のとおり、北欧に関連し各分野で活躍されている多彩なゲスト・スピーカーをお迎えし、オムニバス形式で進めていった。授業の中では、Q&A セッションや学生の課題レポート発表の機会が設けられたことで、双方向型の授業が実現され、学生だけでなく図書館員にとっても気づきの場となった。また図書館と授業をつなぐため、各回のテーマに関連のある図書館リソース（本やオンラインデータベース）の紹介をスポット的に織り込んだ。たとえば、「北欧の芸術」の回では、“ナクソス・ミュージック・ライブラリー”というクラッシックを中心とした音楽データベースを紹介した。また当科目のウェブページを図書館サイト内に立ち上げ、各回の講師の推薦本を紹介し、図書館蔵書目録（OPAC）とリンクさせて、受講学生を図書館資料の活用に導いた。また、コーディネーターの先生はじめ講師の方々には、当科目の趣旨に沿って、授業と図書館とのつながりにご配慮いただいた。たとえば、文学作品紹介では実際に図書館所蔵の資料を提示し、北欧事例の中で図書館事情に触れるなど、図書館を意識して講義いただいた。また、レポートは「北欧諸国に関する図書、新聞や雑誌記事を読んで、内容紹介と自分なりの考察を述べる」という課題であり、図書館資料の利用を含め、情報活用のプロセスを体現できる内容であった。

授業の第 12 回「知識社会と大学図書館」の回は、図書館職員が担当した。この授業では、情報収集のテクニック的なところではなく、概論的な内容となるよう意識した。前半では、北欧（フィンランド）と日本の図書館文化・読書文化の比較や情報探索のステップについて触れ、後半では、図書の貸出率など立教大図書館の利用概況やサービスを紹介した。コンテンツ作成は、既存のものをアレンジするのではなく、白紙の状態から作り上げていくもので、この授業の趣旨を何度も確認しながら作業を進めていった。そのため担当者としては、完成までには相当の労力と時間を要したが、正課授業にこうした形で関わることができたことは、職員として得難い貴重な経験となった。

4. 成果と課題

授業企画から開講まで、担当者は全速力で駆け抜けた感があり、緩急のつけかたに工夫が必要であったと感じている。ただし、今回教員と共働で授業を作っていくなかで、学習支援の新たな方向性や知見を得ることができ、図書館員としてだけでなく職員としても学ぶところが非常に多かった。また、図書館の「教養科目型」授業への取り組みは学外的にもあまり例がなく、情報リテラシー教育支援の新たな枠組みを提示できたことは大変意義深いことであったと考える。今回の授業は、一朝一夕に何かスキルが身に付くというものではなく、大学での学びを図書館活用につなげていく気づきの場の提供であり、涵養的な要素が強い。また、全カリ授業の特徴である専門分野の枠を超えて幅広く学生に授業を提供できたことは、授業内情報検索講習会とは異なる切り口で汎用性の高いものとなったが、その対象は学生総数から見ればごく一部であり、図書館利用率などで飛躍的な効果をはかることは難しい。

図書館は「知の宝庫」と表現されるが、この「知」は図書館側の理論ではなく、利用者すなわち学生のニーズに合わせて、時期や内容を含めて幅広く柔軟なサービスを提供することが図書館に求

められている。学生の「知」に図書館が関わるタイミングは、学生個々の学習段階や目的によって異なる。様々なニーズや状況に合わせて、学生の「知」を引き出していくためには、図書館が実施する情報リテラシー教育も多様なスタイルを用意することが大切である。全カリ授業「北欧に学ぶ」は、その一つの試行的な取り組みであり、新たなサービスの可能性へつなぐ布石となったと考えられる。

先述のように、情報リテラシーとは、単に情報通信技術（ICT）を身に付け、情報を収集するだけではなく、情報について自ら考え、評価し、それを活用して新たな情報価値を生み出す力である。よって、情報リテラシー教育は大学全体で取り組むべき課題であり、図書館と教員（授業）さらには初年次教育、キャリア教育とも連携し、有機的に結びつけていくことが重要であると感じた。

5. 最後に

この授業は、前図書館長の青木康先生、コーディネーターの小川有美先生はじめ多くの方々の熱意と協力に支えられて実現した。この場をお借りして、ご指導・ご協力いただいた全ての方に厚く御礼申し上げる。

あしだ　しょうこ
（本学専任職員／図書館利用支援課）